

単語リスト型語彙学習についての研究

— 心理的影響を視野に入れて —

外国語科 工 藤 泰 三

英語の語彙を学習する際に、単語リストなどを用いて機械的に学習させるケースは高等学校の現場でも多く見られる。しかしその効果については明確な根拠に乏しい。本論では機械的な語彙学習が生徒の語彙力増強に実際に有用であるかどうかを調査したが、その効果はあったとしても低く、また学習に対して心理的に負の影響を与えることによって学習の妨げになる可能性を示すこととなった。

キーワード：語彙学習 語彙指導 機械的学習 心理的影響 自習

1. はじめに

語彙の知識は言語の運用能力を支える最も重要な部分であることは言うまでもないことである。英語学習においても、特に大学受験を目指す高校生が単語集などを用いて単語のリストをひたすら覚えるように学ぶというケースが多く見られる。筆者の知る限りでも、高等学校でも授業の一環として、あるいは受験指導の一部として生徒に単語集を与えて暗記させる活動を行っているところが多い。しかしながら、そのような機械的な学習は、生徒の視点から見ると単調でつまらないものになりがちで、その効果についても明確な根拠がないまま「やればできる」と信じて学習する生徒（学習させる教師）が多いように思う。

本論では、そうした機械的な語彙学習が本当に効果を発揮するものなのかどうか、生徒の心理的変化を視野に入れて調査研究を行う。

2. 文献研究

前述のように、単語リストをひたすら覚える形式の語彙学習は日本では珍しくないが、近年の研究ではその手法を支持する研究はほとんど見当たらない。Carter and McCarthy (1988)、Harmer (1991) および Folse (2006) では、次のような研究が紹介されている。

- Judd (1978)：語彙はできるだけ早い段階で多く、かつ自然で豊かな言語環境の中で学習されるべきで、独立した状態で学ばれる語彙は概して後に残らない。
- Cowie (1978)：語彙学習の教材では、意味のつながりとコロケーション（連語関係、語と語の配置上の密接さ）を重視すべきである。

- Alderson and Alvarez (1979)：語彙は推測の手法を取り入れて学習すべきである。
- Brown (1979)：よく使われる一般的な語を利用し、その語を中心として言語活動に用いていくことが学習者の動機付けに結びつく。
- Terrell (1982)：使用頻度の高い語彙を用い、俗語やイディオムは極力避け、抽象的・形式的語彙ではなく具体的なものを表す語彙を多く用いるべきである。
- Nation (1982)：単語リストでの学習より、context（前後関係、文脈）から語彙を学習する方が効果的である。
- Wallace (1982)：語彙を学ぶということは、その語彙を認識し、自らの意志で思い出し、具体物や抽象的概念と関連付け、正しく使用し、綴り、または発音し、適切な連語関係に置き、場面に応じて適切に用い、それが包含する意味と連想させる意味を意識することができるようになるということである。
- Nattinger (1980)：語彙の指導は、語彙を単独で扱うのではなく、さまざまな語が用いられる言語環境の中で行われるべきだ。
- Harmer (1991)：語彙の指導においては、さまざまな種類の活動を通して、より深く学習者を学習活動に関わらせることが重要だ。
- Zimmerman (1997) および Paribakht and Wesche (1999)：多くの文章を読んで多くの語彙に出会うだけでは不十分で、その後にその語彙を用いて英文を書くなどの活動が続くことで語彙学習をより効果的にすることができる。
- Folse (2006)：学習活動の種類よりも、学習する語

彙に触れる頻度、あるいはその語彙を用いる頻度が語彙学習においては大きな問題である。

このように、「単語リスト型学習」を支持する研究はほとんどない。にも関わらず、いまだに多くの学習者が「単語リスト型学習」を選択するのはなぜであろうか。その理由として考えられることはいくつかある。第一に、これらの研究成果がまだ十分日本の英語教育の現場に知られていないこと、第二に、英語に触れる時間が大きな制約を受けている学習環境の中で「単語リスト型学習」が効率よいものであるという考えが根強く浸透してしまっていると思われること（さらに言えば、その方法で学んできた教師がそこから脱却できずにいること）、第三に、大学などの入試において非常に大きなサイズの語彙を要求されること、第四に、実際に「単語リスト型学習」で得た成功体験が教える側・学ぶ側の双方に共有されていることなどである。

では実際に、この「単語リスト型」の語彙学習は効果があるのだろうか。短期間の調査ではあるが、指導の実践を通して考えてみたい。

3. 指導実践

3.1. 研究方法

筑波大学附属坂戸高等学校（以下「本校」）では、1年次に対して基礎力向上の時間（通称「アシスト7（あしなな）」）を週2時間（月・金曜日の7時間目）設け、英語・数学・国語の基礎学力を身につけさせる試みを行っている。

今回の研究では、英語学習に割り当てられた10~11月の2ヶ月間の基礎力向上の時間（1コマ45分、全11コマ）を利用し、次に示した手順で語彙学習をさせた。

① Placement Test (PT) の実施：実用英語検定試験の過去に出題された問題から語彙・文法のセクションを抜き出し編集したもの（記号選択問題40問、並べ替え問題10問）を与え、学習前のスコアの記録をとる。

②単語の学習：毎回単語80語のリストと例文（全8回分、文末の資料1参照）を与え、生徒各自に自習させる。全8回分を配布したので、生徒は計640語を学習することになる。なお、リストに含む単語は東京書籍の英語I教科書 Prominence Iの巻末資料の Basic Words および本文中の語句から筆者が重要と考えるものを抽出した。

③単語テスト：前回に配布されたリストのテスト（例文の空所に単語を書き入れる形式）を実施し、自身

のスコアを記録用紙に記入させる。

④ Achievement Test (AT) の実施：PTと同形式のテスト（問題は異なる）を与え、指導実施後のスコアを取る。

なお、指導前と指導後には、英語学習に対する心理的状态を回答させる簡単なアンケートを実施した。

3.2. 調査結果

まず、PTとATのスコア比較から見てみよう。

	記号選択	並べ替え	計
PT	25.3	2.3	27.6
AT	21.8	2.7	24.5
差	-3.5	0.4	-3.1

表1 指導前後のテスト結果

テスト問題の難易度が等しいと仮定するならば、学習効果が見られるどころか、かえってスコアが低下している。テスト実施上の問題点があった（後述）ことを考慮に入れても、学習後の成果は認められないと言える。

次に、英語（学習）についての事前・事後アンケート結果を比較してみる。なお、質問1~4のそれぞれの値は4点法の選択回答において「そう思う」「ややそう思う」と肯定的に回答した生徒の割合を示している（詳細は資料2を参照）。また、質問5・6については、1週間のうちそれぞれの学習に費やす時間の平均を時間単位で表している。

質問項目	実施前	実施後	差
1. 英語は好きだ	50.9%	48.7%	-2.2%
2. 英語は得意だ	31.9%	28.5%	-3.4%
3. 英語学習は楽しい	53.6%	48.7%	-4.9%
4. 英語学習は大切だ	84.6%	87.0%	2.4%
5. 英語の課題に費やす時間	1.2hs	1.1hs	-0.1hs
6. 英語の自主学習に費やす時間	1.1hs	1.2hs	0.1hs

表2 英語（学習）に関するアンケートの結果

英語（学習）に対する意識を問う項目では、質問4を除き全般に否定的なものへと変化していることがわかる。また、今回の取り組みは生徒が英語の学習時間を増やすことには全く貢献していないことがわかる。

さらに、今回の取り組みに対する意識を実施後にアンケート調査した結果を次の表にまとめる。表2の質問1～4と同様に、4点法で各質問項目に対し肯定的回答をした生徒の割合を百分率で示す。

質問項目	肯定的回答 (%)
1. 以前より単語を覚えられた	68.1
2. 英語の学習の仕方がわかったと思う	46.8
3. この学習は今後役立つと思う	67.5
4. この学習は有意義だった	55.4
5. この学習は楽しかった	44.0
6. この学習にしっかり取り組めた	62.4

表3 今回の取り組みに関するアンケートの結果

生徒の多くが今回の形式の学習は役に立つ(立った)と考えているが、楽しかったと感じている生徒は半数に満たず、また学習方法についてもこの形式が本当によいものかどうか疑問に思う者が多いことが示されていると言える。

4. 考察

4.1. 調査結果について

調査結果について考察する前に、PT・AT実施の際に問題があったことを述べておく。それは、PT実施の際に、30分間で実施する予定だったテストを授業時間の都合上20分に短縮して実施したため、すべての問題に解答することができた生徒が少なかった(正確な数は不明だが、筆者が概観して判断するところでは8割程度の生徒が解答途中で時間切れとなってしまった)ということである。それに合わせ、ATも20分で実施した(問題数は同じ)。多くの生徒がすべての問題に解答するのに十分な時間を与えることができていれば、テスト結果も異なって表れた可能性が高い。

では調査結果について少し詳しく考えて見たい。まずテストの結果についてであるが、表1にあるように、記号選択問題(語彙の問題中心)では得点が下がっているが、並べ替え問題では若干ではあるが逆に得点が上がっている。

この結果についてはいろいろな見方ができる。まずは単純に語彙力が伸びていない(あるいは低下している)という見方である。その原因として考えられるものは、今回の学習形態では効果をあげることができない、今回の取り組みが生徒の学習に対するモチベーションを低下

させている、などである。通常の英語Iの授業(教科書の読解を中心としたもの)の影響も否定できないが、わずか2ヶ月の間の変化を考える上ではその影響はそれほど大きくないのではないかと考える。したがって、今回の取り組みのような「ひたすら覚える」形式の語彙学習の効果は小さく、むしろ負に働く可能性をも持っていると言える。

次に考えられるのは、テスト時間が少なかったため、多くの生徒が時間がかかりそうな並べ替え問題を先にやろうとしたためであるという見方である。並べ替え問題の得点がごくわずかではあるが上昇していることから、この可能性は否定できない。

さらに信頼性の高いテスト実施を通してのデータ収集・分析を行わなければ、どの考え方が正しいのか結論を出すには至らないが、今後の研究の焦点を絞るという意味では有用な情報を提供してくれていると考えていだろう。

次に生徒の心理面に与える影響について考察してみたい。表2のデータから、この形式の学習は生徒の英語(学習)に対する意識を否定的なものに変えてしまう危険性が高いことがわかる。また生徒が英語の学習に費やす時間についても全く向上が見られないことから、生徒の自主学習の促進には寄与する可能性は低いと言ってよいだろう。表3の質問2・5の結果からも、多くの生徒はこの形式の学習方法には積極的に取り組みたいとは思わないことが窺える。そして、前述のテスト結果と合わせて考えると、この心理面での負の力が語彙学習の上で大きな障害になることが十分考えられる。

4.2. 今後の展開

今回の研究では、多くの高校生・教師が効果的であると考えている機械的な語彙学習が、実はそれほど大きな効果を持つものではなく、時にはかえって負の影響を生徒に及ぼしてしまう危険性があることを示すに至った。本論中で述べたとおり調査方法にも問題があったので、この結論は説得力に乏しいものであることは否めないが、今後の研究を進める上で英語の語彙学習に関する興味深い問題点を指摘することができた。

今後、本研究の反省の下に同様のテーマで研究を進めるならば、次の各点を十分留意しておかなければならないだろう。

- ①調査方法の改善：より信頼性の高い評価材料を用い、テストの解答時間を十分に設ける、また調査期間をさらに長くすることにより、より信頼性の高い結果

を期待できる。

- ②元々生徒が持っている英語学習に対する意識との関連を明確にする：今回の取り組みを始める以前から、生徒の間には英語学習に対する意識の差がある。また、本校では4年制大学に進学する生徒の割合は決して高くない（平成17年度の卒業生158名のうち、4年制大学に進学した生徒は70名（約44.3%））こともあり、大学進学を意識している者としていない者と学習に対する意識の差があるのは当然のことである。英語学習に前向きな生徒とそうでない生徒との語彙力向上の差を詳細に分析することは、事前に計画をしていけば十分可能であったらう。
- ③半強制的に学習させる場合と自主的に学習する場合との違いを明確にする：今回の研究では、授業時間を使い全員を対象に調査を行い、教師の監視の下に半強制的に学習させた。しかし、同様の学習をする場合でも、生徒自身がその方法を選んで取り組んだ場合にはまた異なる結果が表れる可能性は高い。
- ④他の語彙学習方法との差を測定する：本研究の根本的な目的は、より効果的な語彙学習の方法を探るということである。それを追求するには、他の学習方法との比較の上で、今回のような機械的な学習が効果的でないことを示すとともに、より効果的な学習方法を見出していく必要がある。比較対象としては、多読の手法を用いたもの、英作文を取り入れた活動、絵やゲームなどを用いてより生徒に親しみやすい方法で学習させる方法、使用される場面を重視した指導法などが考えられる。
- ⑤教材の改善：今回使用した単語リストには、その単語を含む例文と日本語訳のみを掲載したが、不規則動詞の変化や発音などがわからないというコメントを何人かの生徒からもらっている。これらの項目についても充実させていくことで、語彙学習により影響を与えることができるかもしれない。また、それらを含む教材と含まない教材との効果の差を測定することも研究材料としては興味深いところである。

<参考文献>

- Carter, R. and McCarthy, M. (eds.). 1988. *Vocabulary and Language Teaching*. New York: Longman.
- Carter, R. and McCarthy, M. 1988. Developments in the teaching of vocabulary. In Carter, R. and McCarthy, M. (eds.), 39-59.
- Folse, K.S. 2006. The effect of type of written exercise on L2 vocabulary retention. *TESOL Quarterly*, 40, 273-293. TESOL.
- Harmer, J. 1991. *The Practice of English Language Teaching* (New Ed.). New York: Longman.
- Webb, S. 2005. Receptive and productive vocabulary learning. *Studies in Second Language Acquisition*, 27, 33-52. CUP.

<資料1>

学習に使用した単語リスト (一部抜粋)

1	Taizo always says, "Be positive, be <u>active</u> , be creative."	タイゾウはいつも「前向きに、 <u>積極的に</u> 、創造的に」と言う。
2	Mr. Kawakami was here just ten minutes <u>ago</u> .	川上先生は10分前にはここにいたんですけど。
3	Not only you but <u>also</u> your parents should come.	あなただけでなくご両親も来てください。
4	A big smile <u>appeared</u> on the woman's face.	大きな笑顔がその女性の顔に表れた。
5	The old woman looked half <u>asleep</u> .	そのおばあさんは半分眠っているように見えた。
6	He studied hard and <u>became</u> a lawyer.	彼は一生懸命勉強して弁護士になった。
.	.	.
.	.	.
.	.	.

(練習用プリントとして、同じプリントで下線部を空欄にしてあるものもあわせて配布した)

<資料2>

生徒が持つ指導前と指導後の英語 (学習) に対する意識の変化



